

早稲田大学 オープンカレッジ 2019年11月30日

# 日本人と観光の歴史

## 観光を伝える視点から【寄藤 昂】

はじめに・「観光」について改めて考える

観光資源とは何か

観光行動とは何か

そして

観光産業・観光経済・観光公害！



# 1. 観光資源とは何か

- 自然物・自然環境 ー静的な景観ー
- 自然物・自然環境ー動的な景観・事象ー
- 人工物・人工環境ー静的な景観ー
- 人間活動 ー歴史的・文化的活動・行事ー
- 施設型の観光資源

## 1.1 自然環境 一静的な景觀一

- 山岳・丘陵・平原・草原・湿地・沼地
- 溪谷・溪流・湖沼・海中・海底
- 岬・砂浜・砂嘴・砂州・岩・陸繋島
- 鉱物・化石・温泉・鉱泉・湧水
- 樹林・花木・紅葉・草花・花畑
- 野生動物・野鳥・海洋生物

## 1.2 自然環境 一動的な景観・事象一

- 日の出・日没・日蝕・月蝕
- 渦潮・潮流・ポロロッカ
- 火山噴火・噴気
- オーロラ

### 1.3 人工環境 一静的な景観

- 街並み・広場・市場・バザール
- ホテル・旅館・カフェ・レストラン
- 神社・仏閣・教会・モスク
- 美術・工芸作品・文化財・遺跡・遺構
- 城・城址・石碑・記念碑
- 農場・牧場・工場・作業場
- 鉄道・道路・交通施設・港湾施設

## 1.4 人間活動 ―歴史的・文化的活動・行事―

- 宗教行事・祝祭・年中行事
- 演劇・音楽等の活動
- 流通の現場・市場
- 農業・漁業・工業・ものづくりの現場

## 1.5 施設型の観光資源

- 科学館・博物館・動物園・水族館
- 美術館・資料館・劇場・音楽堂
- 競技場・球技場・プール
- テーマパーク・遊戯施設・カジノ

## 2. 観光行動とは何か

### ■ 見る・感じる観光

通常の観光旅行、クルーズ、ドライブ、など

### ■ 参加・体験する観光

いわゆる「体験型観光」、 "こと" 消費など

### ■ 想像する観光

人々の観光行動には、現地への移動や具体的な活動ではなく「情報消費」という形態もある。しかもそれは一定の "厚味" と "広がり" をもつだけでなく、実際の観光行動・消費に人々を導き・促し、場合によっては支配する効果さえもっている。

## 想像する観光・伝える観光

■観光とテキスト・・・紀行文、旅行記、観光案内、ガイドブック

■観光と図版・・・・・・名所図会、観光地図、ポスター、写真、

■観光と動画・・・・・・旅行番組、世界遺産、ロケ地として

「現代では、人々はメディアから与えられたイメージを確認するために現地にしかける。」（幻影の時代、D.ブーアスティン）という側面も・・

■フィルム・ツーリズム、ロケ地観光

■聖地巡礼、創作される観光資源



### 3. 観光とテキスト

ここでは、主として文字で表現される紀行文、旅行記、ガイドブック等について考える。

紀行、旅行記の類は遡ればきりが無いが、単なる個人の記録にとどまらず、読む人々に対して「旅」や「見知らぬ土地」への夢やあこがれをかき立てる意図をもって書かれるようになったのは、江戸後期以降と言える。

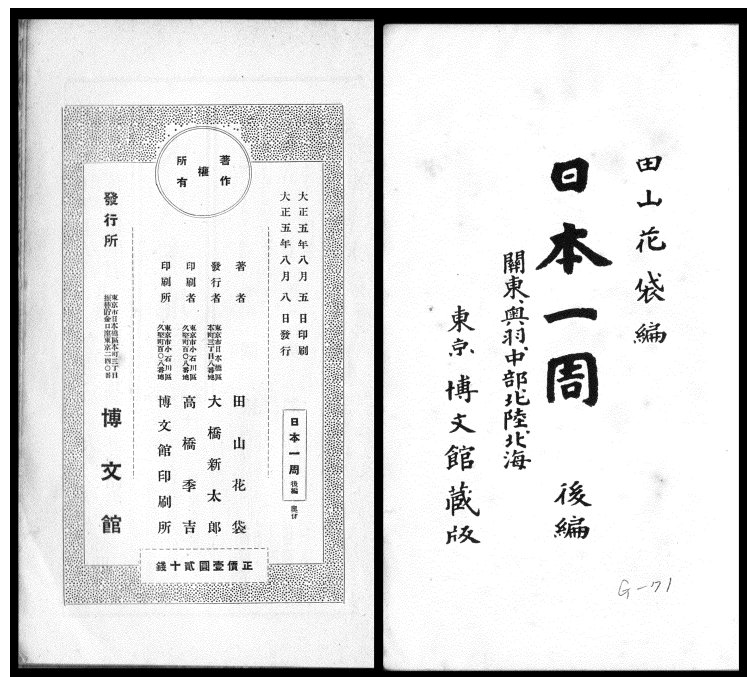
そこで特筆すべきは、十返舎一九による「東海道中膝栗毛(1802~1814年)」のシリーズであろう。「膝栗毛」のような滑稽本ではなく、人々を旅に誘う目的を明確にもった著作が現れるのは明治末期~大正期にかけてである。その中心となったのは、鉄道省であり、一部の文人たちであった。

### 3.1 田山花袋 『日本一周』

田山 花袋（たやま かたい、1872〈明治4〉年～1930〈昭和5〉年  
尾崎紅葉のもとで修行したが、後に国木田独歩、柳田國男らと交わる。  
『蒲団』『田舎教師』などの自然主義派の作品を発表し、その代表的な作家の一人。

大正に入ってから自然派の衰退と新鋭作家の登場で次第に文壇の主流から外れ、紀行文『日本一周』（1914年～1916年）を執筆、さらに田山花袋編として『新撰名勝地誌』全12巻の監修をおこなっている。

『日本一周・後編』 1916（大正5）年



文字通りの旅行記であるが、田山花袋の描写の精緻さから充分ガイドブックとしての機能も果たしており、また文章の巧みさで楽しい読み物ともなっている。

ただ決して宣伝を意識していたというわけではなく、訪問先で「何と云うこともない」などとむしろその土地を貶すようなことも平気で書いている。

傑作なのは、栃木県の鹽原（塩原）の記事で尾崎紅葉の金色夜叉について触れていること。（次ページ）

また、本の末尾にある出版広告の一部を示す。

「『文人の力と云ふものは大きいものだね。鹽原は、金色夜叉で餘程有名になったね。』

『伊香保の武雄浪子と好一對だね』

『お宮が情死しかけた宿屋は何処ですって汽車の中できかれたことがあるからね』

『そいつは面白い』

私達は笑はずには居られなかった。」

(68～69 ページ)

# 新撰名勝地誌

卷一 畿内  
 卷二 東海  
 卷三 東海  
 卷四 東海  
 卷五 東海  
 卷六 東海  
 卷七 東海  
 卷八 東海  
 卷九 東海  
 卷十 東海  
 卷十一 東海  
 卷十二 東海

田山花袋君著

全十冊

每冊四六判洋布上製五百頁以上 正價各七十五錢  
 銅版地圖及名所寫真版數十個挿入 郵税 各八錢

## 本書の特色

△交通路に由りて名勝を記したる事其の一也  
 △商業地帯に由りて名勝を記したる事其の一也  
 △交通路に由りて名勝を記したる事其の一也  
 △商業地帯に由りて名勝を記したる事其の一也  
 △交通路に由りて名勝を記したる事其の一也  
 △商業地帯に由りて名勝を記したる事其の一也

東京博文館 町本

坪谷水哉君著

# 改訂 日本漫遊案内

山水行脚

正價八十錢 郵税八錢

新山水行脚

正價七十五錢 郵税八錢

東西南北

正價七十錢 郵税八錢

東京町 博文館

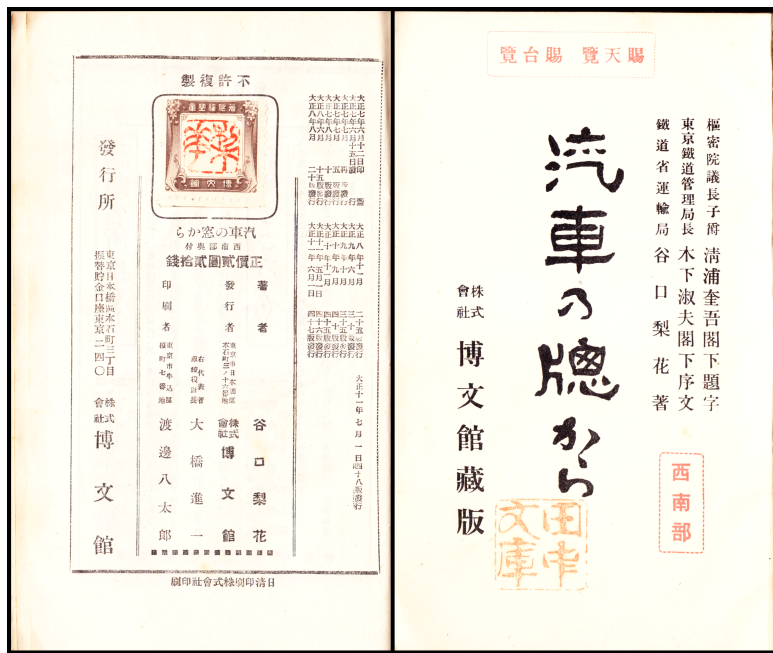
全二冊四六判 各八錢  
 列洋裝上製 各八錢

本書は、著者が親しく各地を巡歴して觀察する  
 所に依り、大都會名勝、温泉、海山の形勝、水陸の交通、産  
 業の情況、風俗の善惡、料理店、舟車の費額、土産  
 物の調達に至るまで詳述して遺憾なし。上巻に  
 東北部と下巻に西半部の彩色詳地圖を附し、  
 地方に旅行するものは勿論、一室内に之を讀  
 まば座ながらに名勝を知り、山泉水色自然の美  
 景を賞するを得べし。

### 3.2 谷口梨花 『汽車の窓から』

日本の近代的な旅行ガイドブックは明治期に入り、鉄道とともに進歩した。日本で最初の近代的・本格的な旅行ガイドブックは、1911（明治 44）年『鉄道院線沿道遊覧地案内』として刊行され、その後改訂・改題された『鉄道旅行案内』とされる。この『鉄道旅行案内』で執筆・編集に関わっていた谷口梨花が、1918（大正 7）年に個人の著作として博文館より出版したのが『汽車の窓から』（西南部・東北部）である。

## 『汽車の窓から』 1918年





### 3.3 鉄道省 『日本案内記』

1929（昭和4）年頃より、鉄道省が編集した『日本案内記』の刊行が開始された。北海道編、東北編、関東編、中部編、近畿編（上・下）、中国四国編、九州編の8冊でからなり、ほとんどの名所・旧跡が紹介された。この『日本案内記』が現在の日本国内のガイドブックの原型となったといわれる。



## 4. 観光と図版

江戸期以前の観光や旅にかかわる図版としては「名所図会」を挙げるのが一般的であるが、ここでは「地図」に注目する。

近年、伊能忠敬の業績は広く知られるようになったが、その裏返しとして「江戸時代にはおよそ地図と呼べるものは無かった」といった誤った見方も横行している。

広く普及していたという意味でも江戸時代を代表する地図は、石川流宣のいわゆる「流宣図」と、長久保赤水による「改正日本輿地路程全図」である。

さらに大正~昭和にかけて活躍した "鳥瞰図絵師" 吉田初三郎に注目する。

## 4.1 石川流宣 『日本海山潮陸図』

石川流宣（いしかわ・とものぶ、生没年不詳）は元禄期頃に浮世草子・噺本作者・俳人・浮世絵師として活躍した。浮世絵師としては、菱川師宣派に属したとされるが詳らかではない。貞享4年（1687）に本図の元となる『本朝図鑑綱目』を作成し、それを大判化したのが本図で、慶長日本図を変形させたものである。色彩豊かで絵画的に美しく仕上げたことから大変にもてはやされ、かつ記事内容も豊富で、安永年間に長久保赤水が登場するまでの100年余り、再版され続けた。

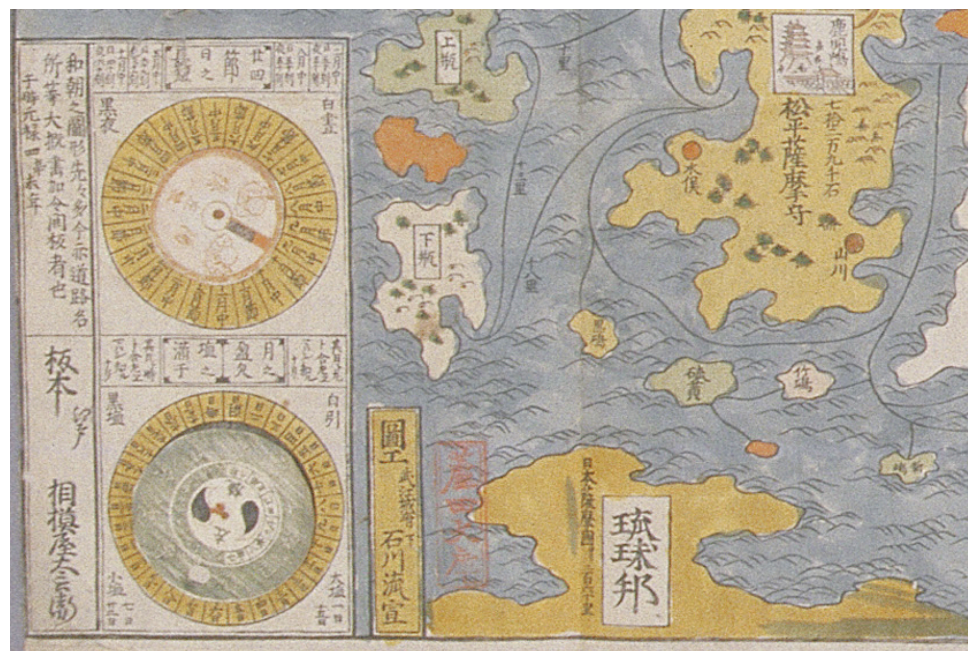
日本海山潮陸図（全体）



# 日本海山潮陸図（中央下部）



日本海山潮陸図（左下部）





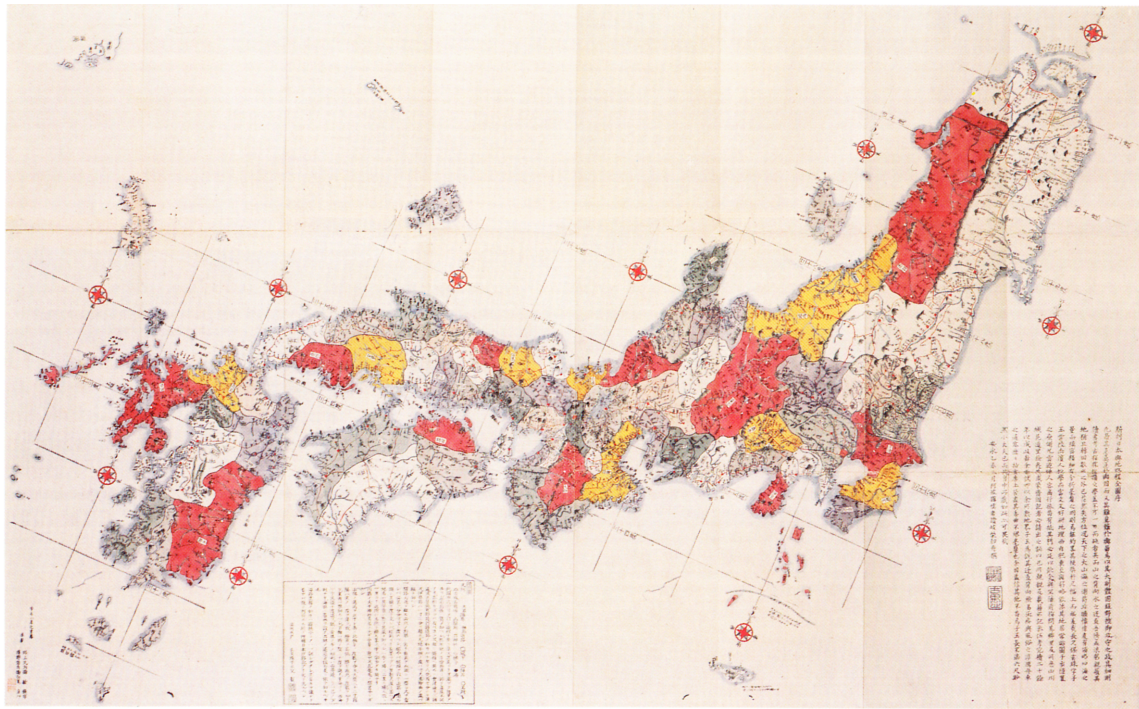
## 4.2 長久保赤水 『改正日本輿地路程全図』

長久保 赤水 1717（享保2）年～1801（享和元）年

1779（安永8）年『改正日本輿地路程全図』を大坂で出版し、その普及に努めた。それ以前に約90年流布していた石川流宣の日本図「流宣図」と入れ替わることになった。42年後に、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』が完成するが、江戸幕府により厳重に管理されたこともあって、この赤水図が明治初年まで一般に広く使われ、約100年間に7版を数えた。沿岸部のほとんど全てを測量した伊能の地図には劣るが、20年以上に渡る考証の末、完成した地図は、出版当時としては驚異的な正確さであった。



# 改正日本輿地路程全図



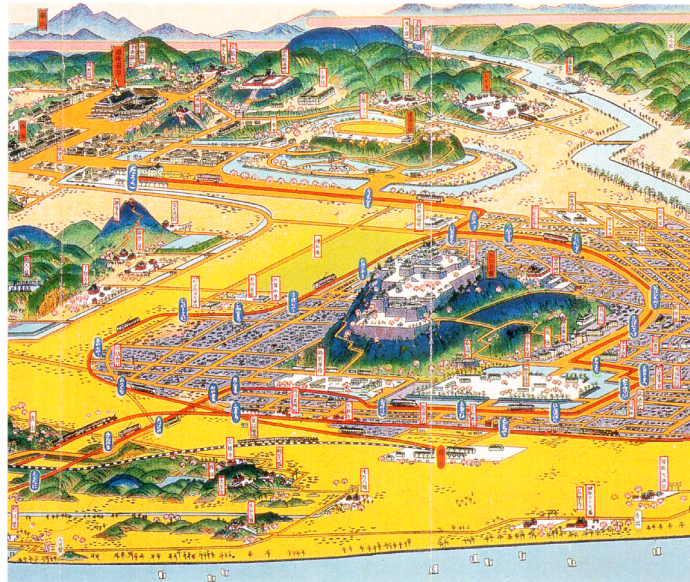
#### 4.3 吉田初三郎 『鳥瞰図』

吉田 初三郎 1884（明治 17）年～1955（昭和 30）年

大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師。生涯において 3000 点以上の鳥瞰図を作成したとされる。

1914 年、最初の鳥瞰図である『京阪電車御案内』が、修学旅行で京阪電車に乗られた皇太子時代の昭和天皇の賞賛を受けた。大正から昭和にかけての観光ブームによって初三郎の鳥瞰図の人気は高まり、大正名所図絵社（のち観光社と改称）を設立する。観光事業にも強い影響力を持っていた鉄道省を筆頭に、鉄道会社やバス会社、船会社、各地の旅館やホテル、自治体、新聞社などが顧客であった。

松山城と道後温泉（部分） 1927 松山市役所



養老電鉄沿線（部分） 1928 養老電鉄





## UNZEN (日支航路案内に収録) 1927 日本郵船



長良川鵜飼 1931 岐阜市



# 大連ーベルリン 12 日間 1939





## 油屋熊八 1928

ポスターに描かれた油屋熊八(中央)と桃太郎(じつは初三郎)

熊八と初三郎は名勝・遊覧地で精力的に活動した。  
「観光」大正14年7月20日号

### 地 覧 遊 演 講 發 開

本社には遊覧地開發の講演會を各地に開催しその使命の完成に努める計劃をもつてゐます。既に遊覧地開發の軌跡を續けてゐる功績者を講師に囑託し陣容を整つてゐます。御希望の向は本社講演部宛御申込み願ひます。

主 幹 廣 瀬 春 忠 氏  
主 幹 梅 田 凡 平 氏  
主 幹 油 屋 熊 八 氏  
主 幹 別 府 民 間 外 務 大 臣 吉 田 初 三 郎 氏  
主 幹 名 所 關 聯 界 の 第 一 人 者 油 屋 熊 八 氏  
主 幹 別 府 民 間 外 務 大 臣 吉 田 初 三 郎 氏  
主 幹 別 府 民 間 外 務 大 臣 吉 田 初 三 郎 氏  
主 幹 別 府 民 間 外 務 大 臣 吉 田 初 三 郎 氏

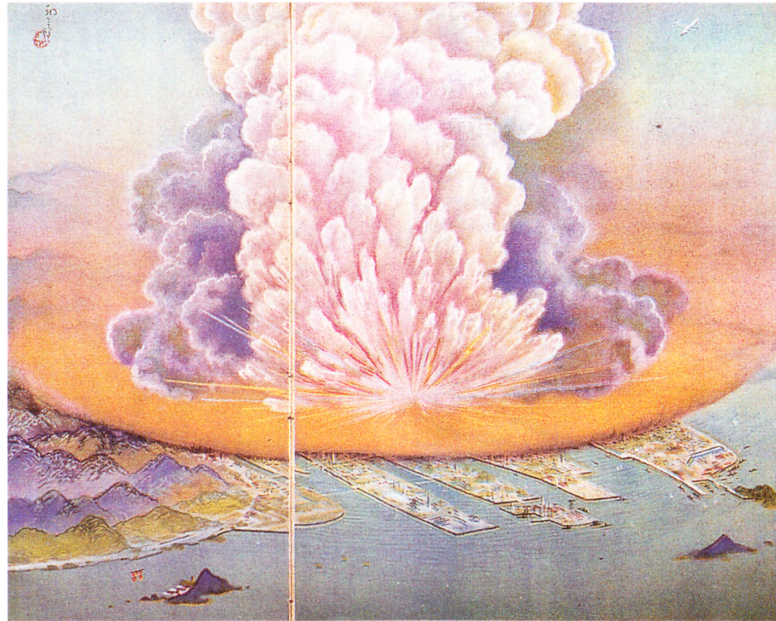


## 観光春秋 1939

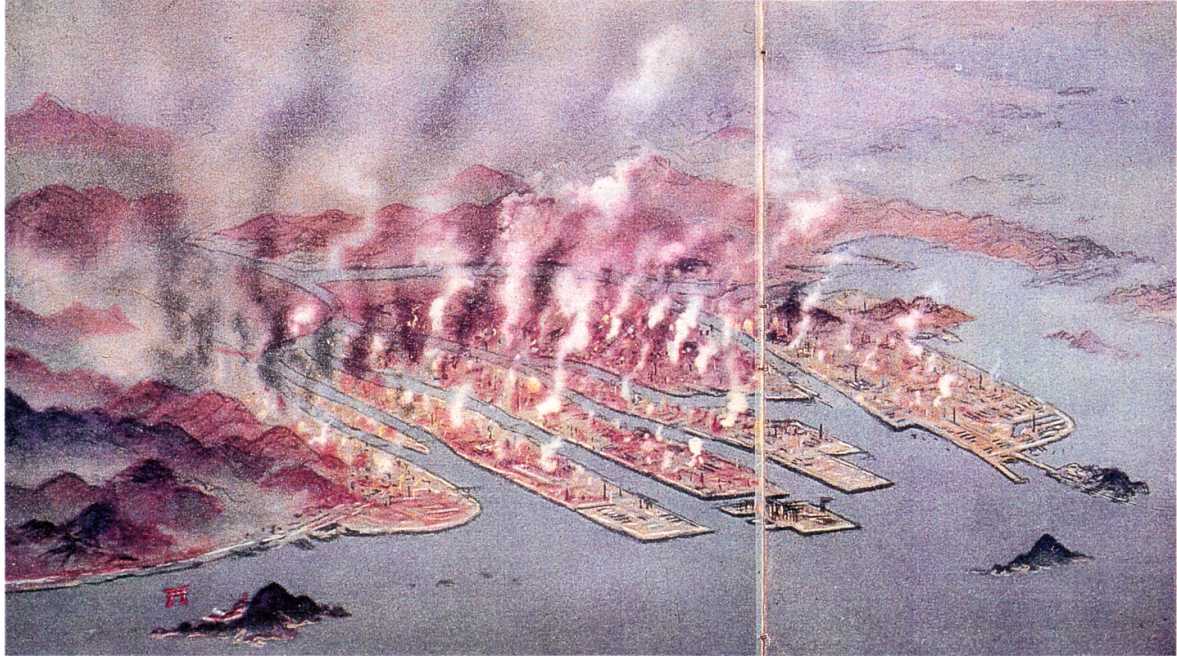




初三郎には、「現地をリアルに伝える」という一種の使命感と誇りもあった。それが、被爆後一週間で現地に入り、詳細な聞き取りを基に制作された「HIROSIMA」8 武作である。 HIROSIMA 3



## HIROSIMA4



## 資料

### ■ 全般

『観光の空間』 神田孝治編著,2009,ナカニシヤ出版,京都

### ■ 個別文献

織田武雄,1974,『地図の歴史－日本編』,講談社,東京

神戸市立博物館,1942,『秋岡古地図コレクション名品展』,神戸市立博物館

谷口梨花,1922,『汽車の窓から・西南部』,博文館,東京

田山花袋,1916,『日本一周・後編』,博文館,東京

鉄道省,1942,『日本案内記・中国四国篇』,博文館,東京

別冊太陽,2002,『吉田初三郎のパノラマ地図』,平凡社,東京

堀田典裕,2009,『吉田初三郎の鳥瞰図を読む』,河出書房新社,東京

## ■ 個別サイト

長久保赤水のページ：高萩市教育委員会

<http://www.city.takahagi.ibaraki.jp/page/page002920.html>

蘆田文庫ホームページ：明治大学図書館

<http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/>